

平成30年3月26日（月曜日）

生涯教育の先駆者 廣池千九郎 ゆかりの人 ⑧賀陽宮恒憲王

賀陽宮邦憲王の第1王子で、陸軍大学校を卒業した後、各地の連隊長、師団長などを歴任し、陸軍中将や最後の陸軍大学校校長を務めました。当時、開設して間もない無名の私塾を皇族が訪れるのは異例のことでした。

しました。このことを中井から聞いた廣池は、歓喜します。皇室に奉仕することを日本人としての道徳の根幹と考えていたからです。また、日本が戦争に向かう中、なんとしてもこれ以上の泥沼化を避けたいという強い思いがあり、皇族である恒憲王に事態の收拾を期待したのです。

も続き、計10回におよびました。昭和13年4月15日に行われた最後の御進講の際には、数日前から廣池の病状が悪化し、40度を超える高熱で食欲も無く、重湯すら飲めない状態でしたが、決死の覚悟で御進講を務めました。翌晩には死期を悟り、辞世を認めています。そして6月4日、廣池は72年の波乱万丈の人生を静かに終えました。

国内外の緊迫度が高まる昭和12年、廣池千九郎（法学博士、1866～1938）のもとに、「皇族の賀陽宮恒憲王殿下が道徳科学専攻塾（現・麗澤大学等）への訪問を希望されている」との報告が入ります。廣池は、恒憲王と出会い、何を伝えようとしたのか。

きっかけは、廣池の門人・中井巳治郎の紹介でした。中井は製紙業中井商店（現在の日本紙パルプ商事）当主の次男で、名古屋支店長などを務めた名古屋経済界の有力者であり、モラロジの熱心な研究者でもありました。恒憲王は名古屋に赴任した際は、中井の邸宅に滞在していました。

廣池は施設を改築し、恒憲王一行を迎える準備をしました。また職員とともに接待の仕方や昼食に饗する料理のつくり方、配膳などについて何度も練習し、細心の注意を払いました。

一方、恒憲王は終戦後に臣籍降下し、賀陽恒憲となります。「モラロジこそ国を救う学問だ」といい、昭和45年に道徳科学研究所（現・モラロジ研究所）の顧問となり、研究所の敷地内に居を移します。顧問としての職責を果たし、昭和53年1月3日、同地にて逝去。戦後の道徳的退廃を憂いながらも、77歳の天寿をまっとうしました。

異例の訪問

廣池はモラロジ（道徳科学）に基づく道徳教育を行うため、昭和10年4月、現在の千葉県柏市に道徳科学専攻塾を開設しました。同塾にはさまざまな要人が来訪しています。

あるとき、中井がモラロジや専攻塾のことを話すと、恒憲王は「そんなに良い所なら行ってみよう」と訪問の意志を示

が来訪してはいますが、特筆すべきは昭和12年4月18日に来塾した、皇族の賀陽宮恒憲王です。恒憲王は神宮祭主



左から廣池、邦寿王（第1王子）、恒憲王、敏子妃

も来塾します。この時、敏子妃は兄の九条道秀公爵も誘っています。廣池の御進講はこの後

（公益財団法人モラロジ研究所廣池千九郎記念館学芸員・矢野篤）



正装で臨む廣池